

詩、あるいは死について — 預言者としての鳥

淵野 昌

2021年1月21日に上智大学で開催された, zoom ワークショップ „Gedichte und Übersetzen – Lesung und Gespräch mit Versatorium“ に参加した. この参加にあたっては上智大学の Erich Havranek 氏に便宜をはかっていただいた. 改めて感謝の意を表したい. このワークショップに inspire されて (今これを書いていて日本語に, 英語の “inspired ” やドイツ語の „inspiriert“ などに対応する単語がないことに気がついた. 日本文化では, 新法度以来, inspire されることは処罰の対象と考えられているのかもしれない. その触を破って), 昔に書いた, いくつかの作文をベースにして, 詩や詩の翻訳に関連したことを書いてみたい.

以下の文章は, 2005年12月の日付のあるものである :

ドイツ語の詩の教科書のようなものを先日買った. その中の詩の日本語訳があまりにもひどかったので, 自分の翻訳を試みてみた — 後で気が付いたのだが, 訳出したのは, 偶然, どちらも, 死, しかも生きている者を甘い誘惑でさそうような死をテーマとした短詩である. 昼が私を疲れさせたのかもしれない. 蛇足かもしれないが, ハイネの詩では韻までちゃんと訳出していることに気づいてほしい.

死 それはひんやりとした夜だ

ハインリッヒ・ハイネ

死 それはひんやりとした夜だ

生はといえば蒸暑い昼である

もう暗くなって私は眠くなった

昼が私を疲れさせた

大木が私のベッドの上に枝を拵げる

あのわかやいだ夜鳴き鶯が歌いはじめた

歌うのは恋の歌ばかり

それは夢の中にまで聞こえてくる

Der Tod, das ist die kühle Nacht

Heinrich Heine (1797–1856)

Der Tod, das ist die kühle Nacht,
Das Leben ist der schwüle Tag.
Es dunkelt schon, mich schläfert,
Der Tag hat mich müd gemacht.

Über mein Bett erhebt sich ein Baum,
Drin singt die junge Nachtigall;
Sie singt von lauter Liebe,
Ich hör es sogar im Traum.

薔薇よ おお矛盾以外の何物でもないものよ ...

ライナー・マリア・リルケ

薔薇よ おお矛盾以外の何物でもないものよ こんなにも
沢山の瞳うたの下で誰のものでもない眠りとなる
よろこび

Rose, oh reiner Widerspruch...

Rainer Maria Rilke (1875–1926)

Rose, oh reiner Widerspruch, Lust,
Niemandes Schlaf zu sein unter soviel
Lidern.

リルケの詩の訳の最後から2行目で“瞳”とルビをふったのは、原詩で、ドイツ語の“瞳”の複数第3格 (Lidern) と“歌”の複数第3格 (Liedern) が同じ発音であることをかけていることにちなんでいる。実際、リルケは実際この掛りを意識して“Lidern”という言葉を選んだようである。その証拠に彼自身によるフランス語訳では、この単語は、フランス語の“歌”という単語 (chants) に訳されているのである。

ついでに言うと、同音語の掛りでしめくくられる短詩ということで思いだされるものに、滝口修造 (1903-1979) の「遮られない休息」がある。これは武満徹の同名の初期のピアノ曲にインスピレーションを与えた詩としても知られている。

遮られない休息

瀧口修造

跡絶えない翅の

幼い蛾は夜の巨大な瓶の重さに堪えている

かりそめの白い胸像は雪の記憶に凍えている

風たちは痩せた小枝にとまって貧しい光に慣れている

すべて

ことりともしない丘の上の球形の鏡

そういえば多和田葉子の最近の小説に「球形時間」というのがあった。彼女がその題をつけたときに瀧口修造の詩が頭にあったのかどうかは、ぜひとも聞いてみたいものだと思う。

(2005/12/31)

ドイツの再統合よりずっと前、ベルリンのニコラスゼーの Villenviertel に間借りして住んでいたことがあった。音楽会などで遅くなると、ニコラスゼーの駅まで行くバスがなくなってしまう、そういうときには、深夜バスでレーヴィーゼのバス停で降りて、当時、東ベルリンが管轄していた省線の線路の脇の暗い道を歩いてニコラスゼーまで帰ったものだったが、そんなとき線路の方の暗やみの中で夜鳴き鶯が鳴くことがあった。1940年代のベルリンからのユダヤ人のアウシュヴィッツへの大量輸送は、そこからそんなに遠くないの隣駅のグリュネバルトから出発したのだったが、そんなことを夜鳴き鶯の鳴き声を聴きながら思ったりしたものだった。

上に挙げた2005年の文章は書いた後、ずっと忘れていたのだが、2015年に、ケンブリッジのニュートン研究所から招待を受けて二週間ほどイギリスに滞在したとき、この作文のことを思い出す機会があった。そのことを書いたのが以下の文章である：

数日前からケンブリッジ大学のアイザック・ニュートン研究所に来ている。ケンブリッジは多分20世紀の前半の面影が沢山残っていて、それが、僕のイギリスに対するステレオタイプ・イメージみたいなものとあまりにも良く一致するので、笑ってしまう。

大学の回りの庭つきの家は灌木の垣根や木塀でかこまれていて垣根や植え込みは手入れが行きとどいているものが多い。赤や紫の小さな実を沢山つけている木がある。ナイチンゲールが鳴いて夜があけて霧が町を覆って、霧がはれるころには昼になっている…

よく考えてみると、僕のイギリスの大学町のイメージは、西脇順三郎が書いたものから来ているものが多いようだ。西脇順三郎の留学先は、ケンブリッジではなくオックスフォードで、この留学は1920年代の初頭のことだったが、彼の詩に出てくる

ナイチンゲールがなくて
夜があけてきた
僕の頭が大理石の上に薔薇の影となる。

(ambarvalia 栗の葉)

イギリスの大学の町でぶらついている頃
霧が北海からやつて来て
先生の生垣が半分見えなくなる

(失われた時)

などは、今僕が見ているケンブリッジの大学周辺とかわらないように思える。到着した日はハロインの夜で、あてがわれたレジデンスへ荷物を押して歩いてゆくと、仮装をした若い人たちの集団と出逢った。数日後に Guy Fawkes Day の花火が上がった。

ナイチンゲールで思い出したのだが、もう10年も前に、ナイチンゲールの出てくるハイネの有名な詩を訳してみたことがあった。 (2015/11/03)

僕がケンブリッジで聞いたナイチンゲールや、西脇順三郎の詩に出てくるナイチンゲールは明け方の鳥で、この時間の鳴き声は、彼等のテリトリーの主張で、夜更けに聴く、ハイネの詩に出てくるような怪しい死への誘惑ではなく、すぐに明けてくる新しい日の希望が感じられる。

生と死の境界にいる鳥、そして異界としての、鳥の住んでいる森、という考え方は、ゲルマン文化特有のものかもしれない。それで思い出したのは、シューマンの『森の情景』(Waldszenen)である。僕の持っている初版の楽譜には古い綴りで、„Waldscenen“とある。この小品集の7曲目の„Vogel als Prophet“ (預言者としての鳥)は、まさにそのような鳥を暗示する音楽と言える。村上春樹の「ねじまき鳥クロニクル」は、この曲が下敷になっているように思える。

[21.01.22(金 04:05(JST)) 補筆]: 死に関する詩をもう一つ訳出しておきたい。以下のBrechtの詩の日本語訳は、高橋悠治の『慈善病院の白い病室から』で用いられている。この曲の演奏と高橋悠治自身による日本語訳の朗読は、[youtube](#)で聴くことができる。ここでの日本語訳は、私にはいささか問題があるように思える。[伯母野山日記](#)でも書いたように、ドイツ語の詩では、ロジックが重要な役割を果しているものが少なくない — これは、ロジカルであることで現実から遊離してしまっている表現と、逆に、ロジカルでないことで、むしろ深い真実の表出となっている、という二通りの現れ方をすることが多い — のだが、こ

れを日本語の雰囲気を表わす表現に翻訳してしまうと、もとの詩にあったものがなくなってしまう。この翻訳ではまさにそれが起っているように思えるのである。

私の訳の方が良い、と主張するわけではないが、対照となる例として書き出してみる。なお、この高橋悠治の曲で使われている訳での「慈善病院」は Charité の日本語訳であるが、昨今の Alexei Navalny の暗殺未遂での報道などにより、Charité は固有名詞としても十分に国際的なものになっているのではないかと考えて、以下では音訳して「シャリテ」と訳している「慈善病院」は慈恵病院と間違えてしまいそうだが、「シャリテ」だと慶應病院と同格の病院のように聞こえてしまうかもしれない、しかし、多分、医療施設、医師集団としての現在のシャリテは、慶應病院よりずっと格が上で、それは、Christian Drosten 教授のインタビューなどを聞くと如実にわかる。

内容から、ブレヒトの詩は、死の床で書かれたもののようには思えるかもしれないが、実際には、彼は、シャリテを退院して1年くらいしてから亡くなっている。

アムゼルは、秋山邦晴の書いたものに „Musizieren“ と鳴く鳥、として出てくる。メシアン音楽に出てくる «Merle Noir» である。これが「黒つぐみ」と訳されることがあることから、高橋悠治の使っている訳詩ではつぐみという言葉があてられているが、これは夜鳴き鶯を鶯と訳すのと同じような誤訳と言えるだろう。アムゼルとつぐみでは、少なくとも鳴き声に関して、ベルカント唱法と浄瑠璃の謡くらいの差がある。

アムゼルはテリトリーがとても広いので、鳴き声が聞こえてくるときには、一羽のアムゼルのことが多い、遙か彼方の隣のテリトリーから、別のアムゼルの声のエコーのように聞こえてくることもある。詩でも „Eine Amsel“ となっているが、この意味で、ここでの „Eine“ は explizit に訳さなくてはいけない不定冠詞である。

ALS ICH IN WEISSEM KRANKENZIMMER DER CHARITE

Bertolt Brecht (1898 – 1956)

Aufwachte gegen Morgen zu
Und eine Amsel hörte, wußte ich
Es besser. Schon seit geraumer Zeit
Hatte ich keine Todesfurcht mehr, da ja nichts
Mir je fehlen kann, vorausgesetzt .
Ich selber fehle. Jetzt
Gelang es mir, mich zu freuen
Alles Amselgesanges nach mir auch.

シャリテの白い病室で

ベルトルト・ブレヒト

夜明け近くに目がさめ
一羽のアムゼルの鳴く声を聞いて
分ってきた。もうだいぶ長い間
死の恐怖など持っていなかったのだ、なにしろなくて
困るようなものなど何もありえないのだから、もし
私自身がなくなってしまったときには、今は
すべてを受け入れられる
私がいなくなった後のアムゼルの歌声さえ。